

家庭・子ども支援室『あゆみ』について(1月)

～ あ せらず ゆ っくり み らいへ ～



焼津市教育委員会 学校教育課

1 不登校の克服に向けて

(1) 新たな不登校児童生徒を生まないために

○学校が中心となって魅力ある学校づくりに取り組む。教育センター「みらい」が魅力ある学校づくりに向け、学校を全面的に支援する。

→ ・子どもにとって魅力ある授業の実現

・子どもが「行きたい」と思える何かをつかめる学校に

・教職員の資質・能力の向上を目指し、校内研修等へ参加し助言する

(2) 不登校の早期発見、早期対応

○学校が、子どもや家庭の変化を察知し、即時に対応できるよう、家庭・子ども支援室は、学校からの依頼を受け、ケース会議を行ったり学校にアドバイスをしたりする。

→ ・学校からの要請を受け、ケース会議を行い即時対応

・スクールカウンセラー（以下 SC）やスクールソーシャルワーカー（以下 SSW）などの専門職や関連機関と連携しアセスメント

・学校や関連機関とプランニングを共有

・直接支援者の学級担任や不登校担当者への助言

(3) 長期化している不登校児童生徒への対応

○家庭・子ども支援室『あゆみ』が積極的に関わり、学校や他機関と連携してそれぞれの子どもや家庭の状況にあった対応を行う。

→ ・学校が把握した問題を抱える家庭の情報を共有

・アセスメントによるそれぞれの子どもや家庭の状況にあった適切な支援

・焼津市こども相談センター（以下、こ相セン）、静岡県中央児童相談所（以下、児相）焼津市適応指導教室、児童家庭支援センター「はるかぜ」、警察、病院、SSW、SC などとの連携

・適応指導教室や民間フリースクール、様々な福祉資源等につなぐ支援

・学校や公民館等での直接支援、また登校につなげる家庭訪問による支援

※ 『あゆみ』の支援イメージ



2 家庭・子ども支援室『あゆみ』の具体的な対応

(1) 対応実績(1月末日時点)

- 学校から、要望のあった児童生徒数 122 人
 - 学校以外 (SC や SSW、保護者) から要望のあった児童生徒数 8 人
- } 計 130 人
- 対応した児童生徒数 49 人 (転出 1 名含む) ※小学校 (12 校 26 人) ※中学校 (7 校 23 人)
 - ・不登校家庭訪問相談事業『はじめに一步』・・・46 人 (重複含)
 - ・学校生活充実家庭訪問相談事業
 - 『ささえて一步』・・・1 人 (重複含)
 - 『いっしょに一步』・・・5 人 (重複含)

○学校や関連機関と行ったケース会議の回数 58 回

○家庭訪問で直接支援した回数 228 回

○公民館や学校等で直接支援した回数 31 回

○学校や庁舎等で保護者と面談した回数 62 回

※児童生徒の姿から

- 登校できた児童生徒数 6 人
- 適応指導教室やフリースクールにつながった児童生徒数 4 人
- 生活の改善 (安定) が見られた児童生徒数 10 人
- 医療に繋がったり、検査が行えたりした児童生徒数 2 人
- 他機関につながった児童生徒数 3 人
- 継続して支援を行っている児童生徒数 26 人

(2) 事例

- ① 中 3 男子 「継続的な学習支援により 2 年ぶりの復学となった事例」
 - ・中 1 の 7 月以降、中 2 も中 3 の 12 月途中まで全欠
 - ・家庭状況が複雑で母の養育不安定もあり、数年来、こ相センが月 1 程度で訪問支援していた家庭 (焼津市要保護児童対策地域協議会乳幼児部会の対象家庭)
 - ・学校依頼を受け、あゆみ担当が 7 月から、週 1～2 回での訪問を開始
 - ・本人の学習意欲が高く、8 月末から週 2 回に訪問を増やし、学習支援を継続
 - ・中学校の 3 者面談で定時制高校進学意向が本人からあり、母と共に定時制高校の説明会にも参加
 - ・12 月の 3 者面談をきっかけに登校するようになり、年明け、午後まで学校にいることもあった。
→学校やこ相センがこれまで訪問を続けてきた。中 3 になり本人の学習意欲が高まったところにあゆみの継続的な家庭訪問が重なり、本人が徐々に自信をつけ、2 年ぶりの登校に至った。

② 小2 女子 「本人の特性に合った就学支援を進める」

- ・入学式を欠席し、小1の夏から現在に至るまで教室に入ることができていない。
 - ・「はるかぜ」、県立こども病院が関わってきたケース
 - ・『あゆみ』は6月から支援を開始し、学校職員とはるかぜ担当と一緒にこども病院に情報収集を行った。
 - ・8月、本児の家庭内での暴力的行動が高じ、児相の育成相談となる。
 - ・学校と本担当に加え、関係機関（児相・はるかぜ・適応指導教室焼津チャレンジ）でケース会議を行い、本人の特性（自閉症スペクトラム）について共有
 - ・各機関で役割を分担し、家庭の教育力をつけたり本人に自己コントロール力を高められたりするよう支援してきた。
 - ・来年度の、特別支援学級入級に向け、保護者の見学、本人の体験等に同行し支援を進めている。
- 所属の小学校、こども病院、児相相談所、はるかぜ、適応指導教室、あゆみ担当、複数の関連機関がそれぞれの強みを生かして役割分担し、連携した支援で本人や家庭の安定につながり、来年度、特別支援級入級に向かっている。

③ 小3 女子 「ひきこもり状態が深刻化しており未だ改善にいたらない」

- ・小2の年度末から欠席が増え、小3より全欠
 - ・原因がはっきりつかめず、コロナ休校からまったく学校に来ない。
 - ・家ではゲームや動画を見ているだけで、自室からほとんど出てこない。
 - ・半年以上、家から全く出でおらず、短期間で昼夜逆転を繰り返している。
 - ・本人は、学校職員やSSWの訪問、さらにはあゆみ担当者の訪問を拒むわけではないが、話しかけても全く反応しようとしない。
 - ・あゆみ担当者とSSWは別日に、毎週自宅を訪問して、母親と面談を繰り返しているが、現状打開に至っていない。
- 家庭訪問しても改善が見られない。要対協学齢児部会にあげ、関連機関と共に対応を考えているのだが、今後もさらなる対応策を講じる必要があるケース。

④ 小6 男子 「関連機関が連携し、父・母を支えることで向上したケース」

- ・小4の11月から全欠席
 - ・朝から夜中までゲームをしたり動画を見たりし、父や母の言うことを全く聞かなくなっていた。
 - ・母に対して暴力を振るうようになり、父も母も対応に苦悩していた。
 - ・父母に相談意欲があったため、民間相談機関等多方面にわたって相談していた。
 - ・年度初めから学校でケース会議を開いたり、教育委員会で警察・児相を呼んでケース会議をしたりして、本家庭に対応したところ、本人の暴力行為が減じた。
 - ・以降、父母が相談している民間フリースクールとこ相センと教育委員会の3者で、保護者を含めた支援会議を継続的に行うことにより、本人の病院受診に至った。
- ケース会議を重ね、各機関で連携し家庭状況に合わせた支援ができた。その結果、現在も父母の相談は継続しており、本人の表れに向上がみられた。

3 家庭・子ども支援室『あゆみ』の成果・課題と対策(今後の方向性)

(1) 成果・課題

- ① 継続的な家庭訪問支援により、登校再開に至った事例も数件あった。登校再開に至らずとも、ほとんどの家庭で子供も保護者も、信頼して相談する窓口が増えたという安心感を持つに至った。継続的な相談を行った家庭では、子供の表れに向上が見られたり、保護者の安心感につながったりしたのだが、継続的支援に至らない家庭もあった。こうした家庭における働きかけは、ケース会議を継続して支援が途切れないよう対策を講じたり、関連機関のさらなる連携を進めたりしていく必要がある。
- ② 自宅の訪問に抵抗感のある家庭には、公民館を利用した支援が効果を挙げている。学校近くの公民館での支援から、学校内の相談室登校へつながった事例もあった。
- ③ こ相セン、児相、民間フリースクール、警察、病院など、関連機関の連携を深めたり支援協力を多く受けたりすることができた。こうした連携を『あゆみ』が行うことで、学校が支援の停滞を感じていた子供・家庭に対して、それぞれの事案に合った支援を進めることができた。
- ④ 学校からの依頼を受け、校内研修で教職員に対する啓発を行った。今後、このような学校へ訪問して研修をすることに加え、教育センター事業と連携することで、不登校対応に関する教職員の啓発にも力を注いでいく必要がある。
- ⑤ 市内のほとんどの小・中学校で、家庭・子ども支援室『あゆみ』の支援を行っているが、まだ数校、行えていない学校もある。学校に対して『あゆみ』の周知を図っていくとともに、実践事例を増やし、効果を各校に感じてもらえるようにしていく必要がある。
- ⑥ 現在、小学校から中学校への移行支援・情報伝達に取り組んでいる。小6から中1へ途切れない支援継続を進めていきたい。また、中3から高校年代へ進む子供に関しては、相談窓口を広げて地域資源につなぐ支援へと発展させていきたい。

(2) 今後の方向性

- ◇ 学校の様々な問題について『あゆみ』が窓口となって受付け、必要な支援が行われる関係機関に繋いだり、『あゆみ』同行支援を行ったりしていく。
- ◇ 市内各校で不登校対応の支援充実が図られるのが一番の目標だが、来年度は、協力校を数校募り、早期対応の実践モデル校として、今後、各校に紹介するための実践をする。
- ◇ 本人の表れに関して、不登校への先進的な取組を参考に、状況を客観的に見られ

る評価指標を作成したい。段階を細かく設けることにより、学校復帰に至らずとも、家庭内での状況の変化が見て取れるものにする。

- ◇ 不登校の未然予防として教職員に対する不登校対応研修を実施できるよう、教育センターと連携していく。
- ◇ 適応指導教室・SSW・SCとの顕密な連携が必要。常に情報交換できるようにしていきたい。
- ◇ 家庭・子ども支援室を課とすることで組織を充実させ、対応実績を増やしていくことにより、対象家庭はもちろんのこと、学校に対しての支援となる取り組みを目指していきたい。